



高い志と情熱を持ち、人々に勇気や希望を与えた女性5名を表彰

## 「エイボン女性年度賞 2018」授賞式典 開催

－39回目となる今回は「魔女の宅急便」シリーズの童話作家・角野栄子氏が大賞を受賞－

エイボン・プロダクツ株式会社（本社：東京都新宿区、以下エイボン）は、2019年1月31日（木）に今年で39回目となる「エイボン女性年度賞 2018」授賞式典を、都内にて開催いたしました。



「エイボン女性年度賞」は、当社のCSR活動の根幹として、「社会のために勇気や希望を与える女性たちの活動を後押ししたい」という願いのもと1979年に創設した女性のためのアワードです。その年度で顕著な活躍をされた方、長年の地道な努力を結実された方、女性の新しい可能性を示唆する先駆的活動をされた方という観点で、様々な分野で活躍する女性たちを顕彰してまいりました。

授賞式典では、冒頭に中陽次取締役社長より「39回目となるエイボン女性年度賞を開催できたことを心より嬉しく思います。エイボンは、今年で創立50周年目を迎えました。当社の企業理念『the company for women』は、その時代の新しい女性の価値を掲げ、女性の人生のお役に立ちたい、ということが我々の夢でもあります。今回の受賞者、表彰者の方々は、夢を追いかけて実際に形にされた功績のある方々です。エイボンもこの夢を追求し続け、次の50年を歩んでいきたいと思っております」と挨拶がありました。その後、大賞の角野栄子氏（童話作家）及び各賞受賞者へ選考委員からトロフィーの授与、講評を行いました。

受賞者スピーチでは、受賞に対する思いや、自身の活動の根幹にある志などを語っていただき、今を生きる女性たちへエールを贈っていただきました。

### エイボン女性年度賞 2018 受賞者：

カテゴリ	受賞者
大賞	角野 栄子氏（童話作家）
教育賞	新井 紀子氏 （国立情報学研究所 社会共有知研究センター センター長・教授 一般社団法人 教育のための科学研究所 代表理事・所長）
スポーツ賞	田中ウルヴェ 京氏 （メンタルトレーニング上級指導士・ソウル五輪銅メダリスト）
芸術賞	植田 景子氏（宝塚歌劇団 脚本家・演出家）
ソーシャル・イノベーション賞	石坂 典子氏（石坂産業株式会社 代表取締役）

## 【「エイボン女性年度賞 2018」授賞式レポート】

### 大賞：角野 栄子 氏

童話作家



#### <プレゼンター：大宅 映子選考委員スピーチ>※抜粋

大賞の選考時に、候補者として角野さんのお名前が挙がると、全員一致ですぐに決まりました。そして角野さんのご経歴を改めて調べる中で、これまでに 253 冊も出版されていることに驚きました。翻訳だけでも 121 冊です。しかし、出版された量が多いから、数々の賞を受賞されているから「すごい」ということではありません。子どもたちだけでなく大人も含めたみんなが、角野さんの明るさと、夢と希望を与えてくれる物語から、勇気や元気をもらっており、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

私たちから見ると、角野さんは「魔女の宅急便」のような陽気な印象がありますが、初めからハッピーな人生を歩んでこられたわけではありません。5歳の時にお母様がお亡くなりになり、「トンネルの森」の舞台である 1945 年の終戦時には、まだ 10 歳でした。角野さんは当時について「孤独や不安でいっぱいの少女でした」と書かれています。

そんな角野さんがどうやって、みんなに勇気を与えることができる物語をこんなにもたくさん書くことができたのかを勝手に分析させていただくと、まずお父様の影響があったのだと思います。お父様が膝の上で抱っこしながら、たくさんの本を読み聞かせてくださり、『桃太郎』の『どんぶらっこ』というリズムが今でも耳に残っている」そうです。もう 1 つは、ブラジルに滞在されていたことです。日本という島国を出て、ブラジルの大らかな空気を吸ったことで、角野さんの人生が変わったのではないのでしょうか。

どこに向かうのか分からないようなこの世界の中、子どもたちにいい本、いい物語を読ませることで、大切な「心」を与えてくれる、それが角野さんのお仕事です。そして角野さんは「誰もが魔女になれる」「魔女とは、創造力であり、クリエイティビティやイマジネーションであり、みんなが持っているものだ」と言っています。

ぜひこれからも、私たちをますます元気にしてくれる物語を、たくさん書いていただきたいです。本当におめでとうございます。

#### <角野氏受賞スピーチ>※抜粋

このたびは素晴らしい賞をいただき、本当に感動しています。選考委員の方々やエイボンの方々、そしてたくさんのお読者の皆さんに、心から御礼を言いたいです。

私は本当に自分が好きなことを毎日書いてきただけでした。それも 35 歳からです。それまでは自分が書く人になるなんて思ってもいませんでした。ただ「ブラジルにいた」という経験があるだけで頼まれて書き始めましたが、最初は積極的に大喜びで書いたわけではなく、大学の先生に頼まれたから書いていただけでした。

ただ、何度も書き直しをしている中で、ふと、本当にドラマティックに「私は書くことが好きなんだ、一生書いていこう」と、思ったんです。しかし、それが本となり、皆さんに読んでいただけないような下手なものだったので、ただ黙って一人で7年間も書いていました。次の本が出たのは42歳の時です。好きでなければ続けられなかったかもしれませんが、ただ毎日コツコツと書いていました。それを皆さんに読んでいただけたということは、本当にありがたいと思っています。

私が書いているのは、自分が「楽しい！おもしろい！」と思うものです。そうすると、「読んでくれた方も楽しいと思ってくれるに違いない！」という、変な信念みたいなものを持っているのですが、読者の方から時々、「初めて本を終わりまで読むことができました」というお手紙をもらうことがあります。子どもたちは途中でつまらなくなって本を読むのをやめてしまうことがたびたびあり、それがコンプレックスとしてずっと自分の中に残っているようなのです。そんな子どもたちが、本を読み終わったことの誇らしさを私に伝えてくれる手紙を読むと、「良かった」という気持ちになります。

やはり本は、自分が好きで、自由な気持ちで読まないとは好きにはなれません。そして本を好きになるために私の作品を読んでくださったのなら、それでいいのかなと思っています。私の作品を読んで本が好きになり、自分で本を選べるようになって他の作品を読んでいくうちに、その子どもの中に“自分の言葉”というものが積み積もっていくのではないのでしょうか。そしてその子は、その言葉で一生生きていくような気がしています。そのようなことを思いながら、私はこれからも書き続けていきます。

物語とは、そのように読んでもらった時に、その人の中にいささかでも力が芽生えてくるのではないのでしょうか。読み終わった後もその創造力をもって、物語をさらに大きく自分の中に取り入れ、本をどんどん好きになっていく。そして、“自分の言葉”をもって人と話し合い、“自分の言葉”で物を書ける人間になっていくのではないのでしょうか。それを信じ、これからもおもしろい物語を書き続けていくことを、この賞への御礼とさせていただきます。

### 【角野 栄子氏プロフィール】

早稲田大学教育学部卒業。1959年にブラジルに移住し、2年間滞在。帰国後、サンパウロの少年を描いた『ルイジンニョ少年、ブラジルをたずねて』（1970年）が処女作。その後、童話や絵本の創作を始める。『わたしのママはしずかさん』（偕成社）、『ズボン船長さんの話』（福音館書店）で路傍の石文学賞。『魔女の宅急便』（1985年福音館書店）で野間児童文芸賞、小学館文学賞、IBBYオナーリスト文学賞などを受賞。『魔女の宅急便』は、その後シリーズ化し、2009年10月『魔女の宅急便 その6 それぞれの旅立ち』で完結した。またこの作品は、1989年のアニメ映画、1993年のミュージカル、2014年の実写映画、2016年のロンドンでの舞台、2017年からのミュージカルと数々の形態で親しまれている。

作品はほかにロングセラーの「アッチ、コッチ、ソッチの小さなおばけシリーズ」、自選童話集『角野栄子のちいさなどうわたち（全6巻）』（以上ポプラ社）、エッセイ『ファンタジーが生まれるとき』（岩波書店）、自伝的小説『ラストラン』（角川書店）、『ナーダという名の少女』（角川書店）などがある。

近年の作品としては、2015年の『トンネルの森 1945』（角川書店 2016年度産経児童出版文化賞）、最新刊『キキが出会った人びと～魔女の宅急便 特別編』『キキとジジ～魔女の宅急便 特別編その2』（福音館書店）がある。また、それまでの業績に対して、2000年に紫綬褒章、2011年に巖谷小波文芸賞、2013年には東燃ゼネラル児童文化賞、2014年旭日小綬章、2018年国際アンデルセン賞作家賞を受賞した。

## 教育賞：新井 紀子 氏

国立情報学研究所 社会共有知研究センター センター長・教授  
一般社団法人 教育のための科学研究所 代表理事・所長



### <プレゼンター：国谷 裕子選考委員スピーチ>※抜粋

受賞おめでとうございます。私たちは第4次産業革命という大変革の真ただ中にいます。日々あまり実感することはできないですが、今までの産業革命よりスピードが速いということが特徴です。その中心的なところにあるのが、AI（人工知能）の発達といわれています。新井さんの著書を読ませていただくと、AIによる革命に対して大変な危機感をお持ちで、その危機的状況を変革しようとする行動力に圧倒されてしまいます。

AIによる影響について様々な警告を聞いたりしますが、私は、本当にAIが私たちの仕事を奪うのか？ということについて、AIは人が使うものだから人間がコントロールすれば共生していけるのではないかと考えていました。しかし、新井さんは著書で「何もしなければ10年後はない」と書かれています。

AIに置き換わることができない人間の能力とは何か？どうすれば私たちはAIに置き換えられない仕事につくことができるのか？という大きな課題に対して、新井さんは、今の世代の人々は、文章を正しく読解する力を十分に持っていないことを調査で明らかにしました。そしてAIにはできない読解力を獲得できなければ人間はAIに凌駕されてしまうとの警鐘を鳴らしています。そしてこの読解力を身につけるための「教育のための科学研究所」まで自ら設立されており、研究者だけでなく実践者として行動していらっしゃいます。新井さんは、これからの社会では女性が持つ柔軟性、創造力を活用していくことが大事であるということを主張されていますが、新井さんご自身がそのような能力を持ったロールモデルではないでしょうか。

教育賞に選ばせていただいた大きな理由としましても、イノベーションを起こせる人材の育成につながる成果が新井さんから今後も生まれることを願ってお渡ししたいと思います。本当におめでとうございます。

### <新井氏受賞スピーチコメント>※抜粋

この度は栄えある賞に選んでいただき、誠にありがとうございました。エイボンの皆様、選考委員の皆様、運営の皆様、日頃の活動を支えていただいている皆様、そして特に読者の皆様に心より感謝申し上げます。私は、頂戴した賞の名前が「教育賞」であることに心から嬉しく思っています。「数学」でも「人工知能」でも「科学技術」でもなく、「教育」賞。この「教育」賞とは何だろう、と私が受け止めたことについてお話しさせていただきます。

私は一橋大学の法学部から数学の道に進みました。数学で37、38歳くらいまで一生懸命仕事をしてまいりました。その中で、ただ研究をしているのは何か違うな、ということを感じはじめました。プリンストンの高等研究所にいる友人で、有名な数学者アヴィ・ヴィグダーソンに「私は、ただ数学で他の人よりも少し

でも優れた仕事をするのではなく、社会と接点をもつような仕事がしたいのだけれども、それは数学者として落第だろうか？」と聞いたとき、彼は「ノリコ、何故それを迷うの？」と言ってくれました。その一言で、好きなことを好きなように思い切ってすることが良いのだと気づかされました。

本日受賞された方、選考委員の方のご経歴を拝聴しても、“この道一筋”の仕事をされてきた方ばかりではないと思います。数学やAIの会議に出ると、「それをやったのは初めてか」、「今までよりも 1000 倍速いか」というような軸で評価されます。でもそれだけではない評価軸があるのではないかと、ということが今回、受賞者された方々のお話なのだと思います。

1970 年代から日本の高度経済成長期は、「初めて」「去年より 1000 倍」「コストは 10 分の 1」ということを追い求めてまっしぐらに走った時代でした。その後のバブル崩壊によって、失われた 10 年、あるいは 20 年といわれる時代になり、特定の分野で「先人よりも少しでも前に」ということだけを追い求めていけばいいわけではないのだと、皆さんが徐々に気づいてきていると思います。

今回、私が受賞させていただいたことにより、そのような意識の広がりを実感することができましたし、これからの社会を作っていくにあたっての日本の未来を感じました。そして、その仲間に加えていただいたことを大変光栄に嬉しく思います。本当に皆様ありがとうございました。

### 【新井 紀子氏プロフィール】

一橋大学法学部およびイリノイ大学数学科卒業、イリノイ大学 5 年一貫制大学院を経て、東京工業大学より博士（理学）を取得。専門は数理論理学。数学以外の主な仕事として、教育機関向けのコンテンツマネジメントシステム NetCommons や、研究者情報システム researchmap の研究開発がある。2011 年より人工知能プロジェクト「ロボットは東大に入れるか」プロジェクトディレクターを務める。2016 年より読解力を診断する「リーディングスキルテスト」の研究開発を主導。科学技術分野の文部科学大臣表彰、Netexplo Award、日本エッセイストクラブ賞、石橋湛山賞、大川出版賞などを受賞。2017 年には TED、2018 年には国連にて講演を行った。主著に「生き抜くための数学入門」（イーストプレス）、「数学は言葉」（東京図書）、「AI vs 教科書が読めない子どもたち」（東洋経済新報社）など。

## スポーツ賞：田中ウルヴェ 京 氏

メンタルトレーニング上級指導士・ソウル五輪銅メダリスト



### <プレゼンター：有森 裕子選考委員スピーチ>※抜粋

「スポーツ賞」の受賞、おめでとうございます。スポーツ選手というのは、その人の言葉や態度が、社会の多くの人々に対して大きな影響力を持ちます。私がスポーツマネジメントの会社を立ち上げた 2002 年、そうした競技以外の場における、アスリートのメンタルマネジメントをしていく必要があると考えていました。それができる方として、初めて私のオフィスに来ていただいたのが田中ウルヴェ京さんでした。

これまで女性のアスリートにとって、メダルを獲った後の道は、引退や結婚がほとんどで、次なる生き方を描けるような方は多くなかったと思います。そんな中、彼女は、競技経験を通じて得たものだけでなく、海外でさらに学び、日本に戻ってその知識や経験を次の世代に活かそうと長年活動されてきました。メダルを獲得した 1988 年から 30 年。いま次の世代に、ご自身の経験を伝えられています。

彼女が研究しているメンタルトレーニングは、スポーツの現場だけでなく、全ての人にとって、生きていくために大切な考えを学ぶことができます。破天荒で明るい彼女のパワーは、これからも多くの方に元気をくれると信じています。

### <田中ウルヴェ氏受賞スピーチコメント>※抜粋

エイボンの皆様、選考委員の皆様、いつもお世話になっている多くの皆様、このたびは誠にありがとうございます。そして今日初めてお会いする皆様とのご縁に感謝いたします。この「スポーツ賞」の受賞連絡をいただいた際、最初は「なんて悪質なはずらメールなんだ！」と行ってしまいました。なぜなら、現役時代は色々な賞を頂戴しましたが、引退後にこのような賞を自分がいただけるとは全く考えていなかったからです。それだけに今回の受賞はとても信じられず、大変嬉しかったです。

私は大学 4 年生の時にソウルオリンピックで銅メダルを貰いました。小さい頃からの夢が叶い、心から嬉しかったのですが、表彰式を終えた 21 歳の私の日記には、「これからの“余生”をどう過ごそうか」と書いてありました。

頑張ってきたシンクロの道でコーチをやりたいと思い、20 代は代表チームでコーチのアシスタントをさせていただきました。これまでの経験を活かして、選手たちに「心技体」を教えたいと思っていたのですが、指導のうちに気づいたのは、「技」や「体」は経験やマニュアルから教えられるが、「心」だけは少し違うということでした。競技に向かう理由や想いは、一人ひとり皆異なるからです。1996 年、ある選手が、アトランタオリンピック出場を逃しました。もっと自分の力があつたら、「心」を教えてあげられたらと思うととても悔しく、それが私がスポーツ心理学を学ぶきっかけとなりました。

英語に苦戦しながらも、アメリカでスポーツ心理学を学び、なんとか知識を付けて日本に帰ってきました。

当時、「メンタルトレーニング」は、心が弱い人のものと思われており、心の強い人をもっと強く、という考えはありませんでした。日本で皆さんに伝えていく中で、上手くいかないこともたくさんありましたが、アメリカで得た学術的根拠と経験で、なんとかやってきました。

2013年には、車いすバスケットボールのメンタルコーチをさせていただくことになりましたが、やり始めてショックを受けました。腹筋を使いたくても筋肉をつけられない選手や、病気で余命が分からない選手たち。彼らの真剣なまなざしを向けられたとき、どんなメンタルトレーニングを紹介すれば良いのかが全く分からず、迷い、悩みました。学術だけでなく、彼らにどのような背景や思いがあるのか、選手の目を見て向き合い、ようやく今ここまで来ています。

今も、自信はありません。しかし、この「スポーツ賞」が、今日までやってきたことが間違っていなかったという指針の一つなのならば、こんなに嬉しいことはありません。

2018年度の「スポーツ賞」を受賞できたことは、私にとって非常に嬉しいことです。なぜならば、ちょうど30年前の1988年がソウル五輪だったからです。私がメダルを貰ってから30年後に、このような賞をいただけたことを心より感謝いたします。

### 【田中ウルヴェ 京氏プロフィール】

1988年ソウル五輪シンクロ・デュエットで銅メダル獲得。89年～99年、日本代表チームコーチ、アメリカ五輪ヘッドコーチアシスタント、フランス代表チーム招待コーチなどを歴任。91年より渡米し、95年米国セントメリーズカレッジ大学院修士修了後、アーゴジー心理専門大学院、サンディエゴ大学院で、認知行動療法や競技引退後の心理、パフォーマンスエンハンスメントを学ぶ。2001年に帰国後は、トップアスリートから一般までメンタルトレーニングを指導。国内外でも心理学をベースにした企業研修や講演等を行う。パラリンピック車いすバスケットボール男子日本代表メンタルコーチ、なでしこジャパン（サッカー日本女子代表チーム）のメンタルコーチを務めている。報道番組レギュラーコメンテーターも務める。夫はフランス人、二児の母。

## 芸術賞：植田 景子 氏

宝塚歌劇団 脚本家・演出家



### <プレゼンター：原田 マハ選考委員スピーチ>※抜粋

今日はひとつの物語をお話したいと思います。

今から 31 年前のある時、神戸女学院大学 4 年生の女性が、宝塚歌劇団の門戸を叩きました。彼女の胸には「宝塚で初めての女性演出家になろう」という闘志が燃えていました。その彼女の名前こそ「植田景子」。今こちらにいらっしゃる、植田景子さんです。しかし、その時は脚本審査をパスしたものの、面接であえなく落とされてしまいました。その理由は「演出家という大変な仕事は、女性に務まるものではないだろう」というものでした。その後、植田さんは 5 年間にわたって東京やロンドン、ニューヨークで演出を学び、不屈の魂で何度も何度も宝塚の門戸を叩き続け、5 回目にして演出部合格を射止められました。それが、宝塚で初めての女性演出家の誕生へと繋がるわけです。

それ以降、様々な素晴らしい作品を手掛けられています。私もファンの一人で、最新作「Anna Karenina (アンナ・カレニナ)」を拝見しました。素晴らしい演出の力、女性ならではの観点、そして不屈の魂というものを、煌びやかな舞台を通して教えられる思いがしました。こんなに素晴らしい宝塚という文化を、植田さんが世界に向けて発信していただけるように、「芸術賞」を贈ります。

### <植田氏受賞スピーチコメント>※抜粋

このたびは大変栄誉ある賞をいただき、感謝しております。宝塚歌劇団という、世界でも稀有な“女性だけの劇団”の演出家である私が、“the company for women”が企業理念のエイボン様から「社会で活躍する女性を応援する」賞を頂けたことは、意義あることだと思いますし、この機会を本当に感謝しております。

宝塚で 25 年間、夢を売る仕事をしていますが、舞台裏は本当に戦いです。私は色々なタカラジェンヌたちを見て、根源的な女性の持つ強さや、愛情の深さ、優しさ、本当の意味での美しさなど、女性の素晴らしさをこれ以上感じさせてくれる仕事はないという世界で生きています。

日本女性の社会での活躍はまだ難しい部分もあり、入団前の私も、「女性に宝塚の演出家は無理だ」という壁を打ち破るための戦いに 20 代の日々を捧げてしまいました。今となっては 20 代を謳歌したかった気持ちもありますが、その戦いに費やした年月が今の私の根源になっていますし、「何があっても自分の信念に向かって進んでいく」という思いを持つことが出来ました。

いま入団から 25 年経ち、宝塚歌劇団にも女性演出家がたくさん出てきていますし、日本全体でも、女性の社会進出は時代と共に変わってきていると思います。しかし、それでもやはり、まだ女性の声が届かなかったり、男性社会の中で泣き寝入りをしなくてははいけなかったりということも正直、身近に感じております。少しでも女性たちが自由に自分の意見を述べて、それを還元できるような社会に向かっていけるよう、私も

微力ですが「Performing Arts」という世界で何か発信していけたらと思います。

エイボン女性年度賞は今回が 39 回目とのことですが、舞台演出という分野での受賞は初と伺っております。今後、女性のアーティストの活躍を期待していますし、私もひとりでも多くの方に“本当の心の豊かさ”を感じて頂ける“本物の芸術”を舞台の上から届けていきたいと思っています。

### 【植田 景子氏プロフィール】

1966 年 2 月 24 日生。奈良県出身。1994 年宝塚歌劇団入団。1998 年宝塚バウホール公演『ICARUS(イカロス)～追憶の薔薇を求めて～』で宝塚歌劇団初の女性演出家としてデビュー。2000 年『～夢と孤独の果てに～ルートヴィヒ II 世』で宝塚大劇場公演デビュー。2003 年文化庁新進芸術家海外研修制度によりロンドン、ハンブルクへ一年間研修留学を経験。2011 年『クラシコ・イタリアーノー最高の男の仕立て方ー』で文化庁芸術祭優秀賞を受賞。世界的な文学作品からオリジナル作品まで多彩なジャンルを手掛けつつ、一貫して高い美意識に基づく繊細な演出と、観客を物語世界に引き込むドラマティックな作品作りに定評がある。2010 年自伝的エッセイ『Can you Dream?ー夢を生きるー』を出版。

## ソーシャル・イノベーション賞：石坂 典子 氏

石坂産業株式会社 代表取締役



### <プレゼンター：国谷 裕子選考委員スピーチ>※抜粋

石坂典子さん、「ソーシャル・イノベーション賞」の受賞おめでとうございます。20年前、お父様の会社が逆境にあった際、そこに飛び込んで行われた改革は、きわめて大胆で、革新的で、とても素晴らしいものでした。これまでの歩みを著書などで読ませていただきましたが、常に時代の2歩、3歩先をリードして歩んでいらっしゃいます。

石坂さんが目指されているのは、「人と自然と技術が共生する会社」です。いま世界では「資源が循環する社会」を目指さなければならないと言われていますが、それを先駆けて実践し、さらに環境教育まで行われています。著書の中で「いま私たちは自然とともに生きていくために、何を手放して、何を残すのかを考えなければなりません」と書かれており、その志の高さに熱い決意を感じます。

私は現在、テレビから離れてSDGs(持続可能な開発目標)の取材や啓発活動を行っていますが、これを企業の方々にお伝えするときに必ず引用する言葉があります。元富士ゼロックス株式会社社長、有馬利男さんの「会社がSDGsに取り組むことによって、ブランディングに繋がると同時に、働いている社員が“自分たちはこういう価値のために仕事をしているんだ”ということを共有することで会社全体がまとまっていく」という言葉です。石坂さんの取り組みは、まさにこのことを実現しています。

いま、少子高齢化でファミリービジネスの事業継承が厳しくなっているという話をよく耳にしますが、石坂さんは企業の継承をパワフルに、立派に達成されました。私はこれから、日本の経営者の方々に「未来を描いて行動を選択することで、現実は動く」という石坂さんの言葉を紹介していきたいと思います。石坂さんの未来を見据えたパワフルな経営者として成長・活動されている実績、成果をもって、この「ソーシャル・イノベーション賞」を受賞していただきたいと思います。

### <石坂氏受賞スピーチコメント>※抜粋

このような、美しく・強く・輝かしい賞をいただきまして、本当にありがとうございます。私たちの会社が手がけている廃棄物処理というのは地味な仕事で、皆さんの目に触れる機会も非常に少ない中、このような輝かしい賞をいただけたことは、私にとって名誉なことです。

今から15年前、社長に就任した時、私はある男性社員から「女性の経営者は細かいことばかりを気にするから、イノベーションを起こせない」と言われました。その言葉を聞いた時、私は「イノベーションとは一体何なのか?」ということをもろすごく考えました。「なぜ彼は、私にそのようなことを言ったのだろうか?」「彼が考えるイノベーションとは、“新しいことを生み出すこと”なのだろうか?」「それによって会社の更なる発展や成長を願っているのだろうか?」と。

一方で、「イノベーションとはそれだけなのだろうか?」「もしかしたら、私たちが今マイナスだと思っ  
ているような価値観や考え方を変えることも、社会におけるイノベーションなのではないか?」とも思ったの  
です。そして、私たちの仕事がより多くの人から理解され、その社会的意義が評価されるような会社にした  
い、という想いで15年間走り続けました。

今では一般の方にも公開し、昨年は3万人近い方々が見学に来てくださる会社に、そして社員が「自分の  
子どもを入れたい」と言ってくれる会社によく、今は本当に幸せを実感しています。

### 【石坂 典子氏プロフィール】

高校卒業後、米国の大学に短期留学し、92年に父親が創業した石坂産業に入社。埼玉県所沢市周辺の農作物  
がダイオキシンで汚染されているという誤報道によるメディアや地域住民のバッシングを機に、「私が会社を  
変える」と父親に直談判し、2002年に社長就任。環境に配慮した全天候型プラントを建設するなどの改革を  
断行し、「人と自然と技術が共生する企業」を目指し、共に育み共に栄える、100年先の企業づくりに挑戦。  
“見せる、見られる”五感経営を実践し、日本全国、世界中から見学者が訪れる先進的な環境配慮型資源再生企  
業に変革させた。創業52年を迎え、2代目社長の経営「社員が自分の子どもも働かせたい」と言える企業創  
りを目指し、女性の感性と斬新な知性で産業廃棄物処理業界を変革する経営に取組み、次世代のエネルギー  
供給産業になるべく日々挑戦している。

### 【受賞者推薦団体】

受賞者が指名する団体にも受賞者への副賞（大賞 100 万円、各賞 50 万円）と同額を寄付しています。

#### 一般社団法人 日本国際児童図書評議会（JBBY）（大賞・角野栄子氏推薦団体）

<http://jbby.org/>

80 の国と地域が加盟する国際児童図書評議会（IBBY）の日本支部として 1974 年に創設。以来、会員のボランティア精神に支えられながら「子ども・本・平和」をキーワードに活動を行っている。「子どもの本を通して国際理解を深め、世界に平和を」という IBBY の理念に基づき、国際的なネットワークを利用した豊かな情報を使って、多様な背景をもつ人々の相互理解を促し、どんな子どもたちにとっても平和な未来の実現を目指している。

#### 特定非営利活動法人 コモンズネット（教育賞・新井紀子氏推薦団体）

<https://www.commonsnets.org/>

新井紀子 国立情報学研究所教授が開発プロジェクトリーダーを務め、教育機関を中心に広く一般企業にも無償で利用できる国産の情報共有基盤ソフトウェア「NetCommons（ネットコモンズ）」の普及と情報システム構築支援および情報活用支援を目的とした活動を展開。

#### ジョン・ノイマイヤー財団（芸術賞・植田景子氏推薦団体）

<http://www.johnneumeier.org/>

名実共に世界のバレエ界を牽引し、現役の振付家として新作を生み出し続けるハンブルクバレエ団芸術監督のジョン・ノイマイヤー氏が、2006 年に創立。自身が世界中で長年収集してきた、バレエ・リュスを中心とする舞踊とバレエに関する貴重なコレクションの保持、調査研究、公開を通じ、バレエ界のさらなる発展に貢献している。

#### 特定非営利活動法人 国境なき医師団（スポーツ賞・田中ウルヴェ京氏推薦団体）

<https://www.msf.or.jp/>

紛争や災害、貧困などによって命の危機に直面している人びとに医療を届ける非営利で国際的な民間の医療・人道援助団体。「独立・中立・公平」を原則とし、人種や政治、宗教にかかわらず援助を無償で提供している。1971 年に医師とジャーナリストによりフランスで設立、現在は約 70 の国と地域で援助活動に取り組む。1999 年ノーベル平和賞を受賞。

#### 社会福祉法人 三芳町社会福祉協議会（ソーシャル・イノベーション賞・石坂典子氏推薦団体）

<http://www.miyoshi-shakyo.or.jp/>

生活に困難を抱える世帯を支える活動を積極的に行う。母子家庭、父子家庭など、ひとりで仕事と育児をする母親や父親を応援するための『こども食堂』も地域のボランティアと行う。

## 【エイボン女性年度賞について】

「エイボン女性年度賞」は「社会のために勇気や希望を与える女性たちの活動を後押ししたい」という願いのもと 1979 年に創設された賞です。本賞は当社の社会貢献活動の根幹として、その時代ごとに、社会に有意義な活動を続け、自身の信じた道を切り拓いてきた女性たちを表彰してまいりました。また本賞の特徴として、さらなる活動の支援に、受賞者が指名する非営利団体にも受賞者の副賞と同額の寄付金が授与されます。今までに 190 以上もの団体へ寄付をいたしました。第一回目の大賞には、日本の婦人運動家の先駆けとして活躍した市川房枝氏が受賞しており、以降も芥川賞を受賞した作家の田辺聖子氏、数多くのヒット作を手掛けた脚本家の小山内美江子氏らが受賞してきました。



「エイボン女性年度賞」  
ロゴマーク

## 【選考委員】

本年度も、各分野の第一線で活躍される 4 名の選考委員が、エイボンのフィロソフィーに寄り添いながら、目覚ましい活動成果をあげられた方、長年にわたる地道な努力が結実された方、女性の新しい可能性を示唆する先駆的活動をしている方などを選定基準に各受賞者を選出いたしました。



有森 裕子  
元マラソン選手



大宅 映子  
大宅社一文庫理事長・評論家



国谷 裕子  
キャスター



原田 マハ  
作家

## 【エイボンについて】

エイボンは世界をリードする化粧品及び美容関連製品のアメリカ発のダイレクトセリング会社です。

1886 年の創業以来、「the company for women（女性が求める輝きを創り続ける）」であることを企業理念とし、高品質の製品や充実したサービスで、女性のよりよい生活をサポートしています。日本では、1968 年より事業展開し、スキンケアブランド「ミッション Y」シリーズや、メイクアップブランド「エフ エム ジー」など、数々の「きれいと元気」をお届けする製品を扱ってまいりました。

CSR活動においては、1979 年に創設した「エイボン女性年度賞」や、2002 年よりスタートした「ピンクリボン活動」など、早くから女性のための社会貢献プログラムにも取り組んでいます。

エイボンは日本での製品販売開始 50 周年を迎えるにあたり、2018 年 9 月から 2019 年 12 月末までの期間を 50 周年イヤーとして、様々な活動に取り組んでいます。

エイボンコーポレートサイト URL : <https://www.avon.co.jp/>

「エイボン女性年度賞」URL : <https://www.avon.co.jp/csr/womanprize/>